

「皇室御一家」カレンダーにみる皇室像

青木 淳子 (大東文化大学外国語学部特任准教授)

Imperial Family's Image in the Calendar of “Koshitsu Goikka”

Junko AOKI

1. はじめに：目的と先行研究

「皇室御一家」と表紙に記載されたカレンダーが、公益財団法人菊葉文化協会¹から発行されている。縦607mm、横420mm、表紙と6枚のカレンダー部分、そして台紙から構成され、カレンダー部分の1枚目から6枚目まで、皇室の方々の写真が掲載されている。

このカレンダーは皇居内の売店や、大型書店、また菊葉文化協会のHP、アマゾンや楽天といったネットでも購入することができる。本稿では、本年より10年さかのぼり2010年から2019年の「皇室御一家」カレンダーを資料とし、掲載されている写真を主な分析対象とする。皇室の写真が掲載されたカレンダー²は一般に「皇室カレンダー」と呼ばれ人気が高い³。本稿ではまず多くの人が消費する「皇室御一家」カレンダーには、どのような皇室像が表出しているのかを明らかにすることを目的とする。さらに10年間の「皇室御一家」掲載写真の変遷を辿ることで、平成から令和へと時代が変わるにつれて求められた皇室像がどのようなものだったのかを考察する。

カレンダーのルーツとなる暦についての研究は、その歴史や成立について『暦の百科事典2000年度版⁴』『暦の大事典⁵』に詳細にまとめられている。また、カレンダーや印刷の専門雑誌にも「カレンダーの起源・カレンダーはローマ時代から⁶」、「現代カレンダー考—歴史と統計からみれば⁷」、「世界のカレンダーに見る暦の歴史⁸」といった論文が掲載され、古代から現代のカレンダー成立の背景について知ることができる。

しかし、皇室カレンダーについての直接的な学術的研究は管見の限り見当たらない。だが、本稿で考察する皇室像については、多くの研究がなされている。天皇像についての多木浩二著『天皇の肖像⁹』、皇后像についての若桑みどり著『皇后の肖像—昭憲皇太后と女性の国民化¹⁰』は、御真影を中心として様々なメディアに掲載された天皇、皇后像の意味を、国家の近代化を軸に読み解いたものである。また伊藤之雄は『昭和天皇と立憲君主制の崩壊¹¹』の中で、当時の新聞に掲載された

皇族の姿の政治的な意味を解いている。また青木淳子は『近代皇族妃のファッション¹²⁾』の中でファッションを視点として雑誌に掲載された皇族妃および皇后の写真を読み解き、ファッションリーダーとしての皇族妃の役割を明らかにした。こうした近代に限らず、現代の皇室像に関連するものとしては森暢平の「ミッチーブームのその後¹³⁾」や茂木謙之介の『表象としての皇族¹⁴⁾』が挙げられる。また青木淳子も、「新聞記事にみる天皇家の婚儀—新たなプリンセス像の創出¹⁵⁾」で、皇太子妃像についての読み解きをおこなった。さらに吉見俊哉は社会学的視点で「メディア天皇制とカルチュラル・スタディーズの射程¹⁶⁾」の中で、メディアと天皇制について述べている。カレンダーを一つのメディアとして捉えた場合、この論考も大いに関わりを持つ。

本稿ではまず、この10年間の「皇室御一家」カレンダーに掲載された写真を整理・分析し、その上で、上記の先述の先行研究の成果も援用しながら、平成から令和時代にかけてのカレンダーに表出された皇室像を明らかにし、その変遷の意味を考察する。

2. 「皇室御一家」カレンダー

2.1 資料の整理方法等

2010年1・2月の「皇室御一家」カレンダーから順に2019年11・12月の分までを、写真一点を1とし、順に整理した。一年分は6枚で、一枚に1・2月と、二か月分の月日が掲載されている。つまり、10年間のカレンダーは単純に数えると60枚である。しかし、5・6月や9・10月は二枚掲載されることが多い。本稿では写真1枚につき、一点と数えて、写真についての詳細な事項を抽出した。10年間で掲載された写真は全部で74枚であった。この74枚の写真について、題名、掲載人数、掲載人物、状況、ファッションを項目としてデータベース化した。これをもとに分析をおこなった。ファッションを視点として人物を判断する場合、年齢が重要になってくる。本稿では、カレンダーの年に満になる年齢を記した。また、2019年5月1日をもってそれまでの平成天皇・美智子皇后は上皇・上皇后に、徳仁皇太子・雅子皇太子妃は、今上天皇・皇后に、さらに秋篠宮文仁親王・紀子親王妃は皇嗣・皇嗣妃になったが、本稿では、カレンダーに記載された当時の身位で記す。また、本来であれば現代の皇室皇族の方々への言は、敬語を使用すべきであるが、研究という領域¹⁷⁾のため、新聞等の表記と同じ表現を基本とする。

2.2 「皇室御一家カレンダー」掲載写真

2.2.1-① 「新春をお迎える皇室ご一家」：立ち位置からみる親王、内親王の成長。

一枚目の1・2月には毎年「新春をお迎える皇室ご一家」の写真が掲載される。これは10年間で1・2月の10枚すべてがこのテーマであった。年頭を飾るこのテーマは恒例となり、10年間かわらない。

場所は室内で、ローテーブルを前に椅子がおかれ、中央向かって左に天皇、右に皇后が座り、左手に皇太子一家、向かって右手に秋篠宮一家が座る。年により、内親王や親王が前にしゃがんだり、

後ろに立ったりする。この10年間で皇室の人びとも10年、歳を重ねた。2010年時点では現在の上皇は天皇であり77歳、上皇后は皇后で76歳であった。そして現在の天皇は、当時は徳仁皇太子で、50歳、雅子妃は47歳、愛子内親王は9歳であった。さらに皇嗣秋篠宮は、文仁親王で当時45歳、紀子妃は44歳、眞子内親王は19歳、佳子内親王は16歳、悠仁親王は4歳であった。成人が6名、未成年者が4名で合計10名の「ご一家」であった。

「天皇ご一家」が一同に会したとき、まだ成年になっていない、愛子内親王（9：以下年齢はカッコでくくり表記する）、眞子内親王（19）、佳子内親王（16）、悠仁親王（4）は、毎年の成長がうかがえ、カレンダーにおける存在感が大きい。その成長の過程は、毎年の立ち位置の変化でも見ることができる。この親王、内親王の立ち位置から、子供達を慈しみ育てていく「天皇ご一家」の姿勢を見ることができる。

2010年はテーブルの上に木製の立体的なゲームがおかれ、天皇の前に愛子内親王（9）がしゃがみ遊んでいる。そしてゲームを挟んで右手皇后の前に悠仁親王が立ち、愛子内親王が遊んでいるゲームを見つめている。椅子に座る6人の大人はそれを微笑みながら見ている。さらに天皇の後ろには眞子内親王が、皇后の後ろには佳子内親王が立ち、真剣な表情でゲームを見ている。まさにゲームで遊ぶ幼い子供たちを、姉達が応援し、大人が見守るという印象である。

テーブルの上に物が置かれ、それを見る構図は、2012年と2015年にもみられる。2012年は写真アルバムのようなものと箱に入れられた品である。箱の前には愛子内親王（11）がしゃがみ、アルバムの前には悠仁親王（6）が立ち、全員の視線は箱に向かっている。大人は全員微笑んでいるが、愛子内親王は顎に手をやり、何か考えているような表情とポーズであり、向かって右端に座っている眞子内親王（21）と佳子内親王（18）は二人で何か話し合っているかのように、頭をよせあってやや真剣な表情である。なお、10年間のうちでこの年だけは、眞子内親王、佳子内親王とも着席であった。

2015年は、テーブルの上にやや立体的なパネルにした地図のようなものが置かれ、それを悠仁親王（9）が手で触っている。愛子内親王（14）は、天皇と皇后の間の後ろに立ち、その両脇に眞子内親王（24）と佳子内親王（21）が立っている。この構図から愛子内親王はすでに中学生となり、一家の中でお姉さんの仲間入りをしたような印象である。

そして翌2016年には悠仁親王（10）も前にしゃがむことなく、秋篠宮文仁親王と紀子妃の間に立っている。もう幼くはない、悠仁親王の成長が感じられる。

こうして年頭の「新春をお迎えの皇室ご一家」の写真における内親王、親王の立ち位置やポーズ、他の人びとの視線や表情の10年間の変遷から、一家の中で見守られる存在であった内親王、親王の成長とそれを見守る大人たちの姿をみることができる。

2.2.1-②「新春をお迎えの皇室ご一家」：着物に込められた美智子皇后の想い

各人の服装に関しては、皆正月という事で、改まった装いである。改まったといっても、私的な場面と想定されることが美智子皇后の装いでわかる。宮中においては女子の正装は洋装とする、と

いう宮内大臣の達が明治19年に出されて以来、宮中での正式な晩餐会などの場では女性皇族はローブデコルテで臨んでいる¹⁸。10年間を通して「新春の天皇ご一家」写真での皇后は着物である。ゆえに美智子皇后の着物姿から、この写真は、新春を私的に寿ぐ「天皇ご一家」の姿が伝わってくる。さらに、ここに日本の伝統的衣装である着物への、美智子皇后の並々ならぬ愛着を感じることもできる。

2.2.2-①「皇太子ご一家」：愛子内親王の成長と一家の趣味

カレンダー部分二枚目の3・4月は2010年から2018年までの9年間、「皇太子ご一家」の写真が掲載されている。2010年愛子内親王はこの年9歳になる。リビングルームのように、ローテーブルと、白い布張りの長椅子が置かれ、そこに左から雅子妃、徳仁皇太子、右端手前に愛子内親王が座っている。テーブルの上には地球儀と、本二冊が置かれている。『はじめまして にほんちず』『はじめまして せかいちず』である。地球儀を指さす皇太子と、その先を見る愛子内親王、それを優しく微笑みながら見る雅子妃という姿は、学齢期の少女に地理を教える父親、興味深げに聞き入る娘、見守る母親、という風に見える。雅子妃の後ろにはグランドピアノの一部が写り込んでおり、一家の趣味が音楽であることが連想される。

このあと、2011年から2013年まではこの同じ長椅子に三人が座り、ほぼ正面から写っている。座る順番は左が皇太子、右が雅子妃、そして真ん中が愛子内親王である。しかし年度によって、表情に変化がある。2011年はみな歯をみせて、はじけたように笑い、2012年は、皇太子と愛子内親王(11)はアルカイクスマイルである。2013年はまた歯を見せて、楽しげで、雅子妃は二人の方を見ている。同じように三人並んだ「皇太子ご一家」だが、その三人の表情の変化に、楽し気ながらも、一家の様々な様子が、見る者に伝わってくる。写真を撮る時は様々な表情で撮り、カレンダー製作の上で、前年を鑑みたうえで、変化をつけて選択されていると思われる。年度をまたぎ比較すると、その工夫が見えてくる。

9年間のうち、2014年の3・4月は特徴的で、「皇太子同妃両殿下」と「愛子内親王」の2枚が掲載されている。つまり、親子が別々の写真となっている。前年は両親の間に座っていた愛子内親王が、この年は別のフレームで掲載されていることで、従来と比較すると自立した印象を受ける。「皇太子同妃両殿下」写真では、ローテーブルの上に海外の風景が掲載された写真集のようなものが置かれている。オランダの家々のようにも見える。二人の表情は柔らかく、まるで旅の思い出を語りあうようである。一方、一人で掲載されている愛子内親(13)は、長椅子の置かれた部屋と同じ背景の壁の前に立ち、テーブルの前で何か作業をしている。テーブルの上には段ボールの工作物が置かれている。段ボールで作った植木鉢は水色で塗られ、その上に針金の枝がのび、葉っぱの一枚が緑に塗られている。愛子内親王の手には緑色の絵の具があり、これから葉っぱを塗る続きの作業にとりかかるようである。生き生きとした笑顔で楽しそうである。13歳になる年といえば、小学校を卒業して4月には中学校に進学する。フレームが別になったことで、親からの自立が印象づけられるが、それだけでなく、作業の様子が写真に写りこむことで、愛子内親王の芸術に取り組む姿勢や

意欲が伝わってくる。ただアルカイクスマイルで両親の間に座っていた少女から大きく成長した、と印象付けられる。

この後、2015年から2017年までは三人ソファに並んだ写真である。しかし、さらに愛子内親王の成長を見ることができるのが、2018年の3・4月である。これまで3・4月の「皇太子ご一家」の写真は、リビングルームのようなところでの撮影であった。しかし、この年は、学校の門を思わせる場所で、制服姿の愛子内親王（17）を挟んで、左側に皇太子、右側に雅子妃が立っている写真である。愛子内親王が高校生であることが判る。愛子内親王はちょっと緊張しながらも微笑み、手には紺色のやや使い込んだカバンの持ち手が見える。制服の紺のスカーフが風に流れ、画面に動きと柔らかさを出している。三人はただ立っているだけだが、軽やかなスカーフの形に、愛子内親王の心も踊っているかの印象を受ける。そして室内の撮影ではなかなか見られない、皇太子の満面の笑みや雅子妃の微笑みから、娘の成長を喜ぶ両親の気持ちが伝わってくるようである。

「皇太子ご一家」の写真の三人の写りこみ方の変遷から、一人娘である愛子内親王の大きな成長の過程とそれを見守る両親の喜びが、見えてくる。

2.2.2-②「皇太子ご一家」：雅子妃や愛子内親王の普段のファッションの嗜好

2010年から2018年まで3・4月に掲載された「皇太子ご一家」関連の写真10枚のうち、先に挙げた戸外で撮られた愛子内親王制服姿の写真以外は、すべて室内であり、長椅子があるところからリビングのような印象である。そして、そこに写る徳仁皇太子、雅子妃、愛子内親王も自宅での姿と推察される。

皇太子は、基本は例年シャツにセーターである。3・4月で春先という事もあり、シャツのみであったり、時にブレザーを着用したりもしている。オーソドックスだが、常にバランスの取れた服装である。

雅子妃は、2010年から2017年までの8年間すべて、柔らかいニット素材でカーディガン状の上着を羽織っている。そしてすべてパンツスタイルである。カーディガンの色は水色や薄紫、ベージュなど明るく柔らかいもの、丈は普通の腰丈もあるが、襟の付いたジャケット状のものはロング丈であり、パンツスタイルと合わせて動きやすさの中にも、エレガントさを感じる。そして何より特徴的なのは、マベパールのイヤリングである。目鼻立ちがはっきりしている雅子妃の、笑顔を引き立てているのが、この大ぶりのパールの輝きといえるだろう。2010年から2016年まで7枚の写真に写っている。ニット系のシンプルな装いの中に、この大ぶりのパールがアクセントとなり、華やかさも感じられ、雅子妃のファッションに対するこだわりが伝わってくる。パンツにニットの上着と動きやすく、飾りたてずシンプルだが、イヤリングで華やかさを忘れない。プライベートな場でも、そんな皇太子妃としてのポリシーが感じられる。

愛子内親王のファッションからも、嗜好を見ることができる。それは装いの中にさりげなく「甘さ」が加わっている、という事である。「甘さ」とは「可愛さ」「愛らしさ」と言い換えても良いかもしれない。2010年から2017年まで愛子内親王が写っている8枚のうち、2011年を除いて、すべ

てその要素が、ファッションの中にある。多くがフリルで表現されている。たとえば2012年は白いブラウスにグレイのジャンパースカートであるが、ブラウスのスタンドカラーとカフス部分、そして、ジャンパースカートのウエスト部分にフリルがあしらわれている。レースのソックスもフリル付きである。髪はひつつめに、後ろで束ねられ、ポーズも椅子に腰かけ手は膝で揃えられ、端正な印象であるが、衣服のフリルが、「甘さ」を醸し出し、内親王の少女らしさ、愛らしさを感じることができる。この「甘さ」は2016年1・2月の「新春の天皇ご一家」での愛子内親王のボレロ形式のドレスなどにも見ることができる。

2.2.3-①「お田植え」と「初繭掻き」：天皇と皇后の行事

2011年から2018年、つまり平成時代の5・6月の写真は毎年2枚で、そこにはそれぞれの行事に関わる天皇、皇后の姿が掲載されている。天皇は「お田植え」か「お手まき」という稲作に関わる作業をしている。美智子皇后は「山つけ」「初繭掻き」「ご給桑」「上簇(じょうぞく)」という養蚕に関わる作業である。宮中における稲作は、昭和天皇によって始められた¹⁹。養蚕は、明治の昭憲皇太后が始めたものが代々、皇后に受け継がれている²⁰。どちらも日本の農業の根幹であり、これを伝承するという目的があると思われる。

2.2.3-②農作業を行う天皇と皇后：献身

2011年「お田植え」の写真では、天皇はベージュのシャツに、グレイの動きやすいベルトレスで伸縮性のあるストレッチスラックスである。長靴を履き、水田にしゃがみ、右手で苗を植え、左手には苗の束を持っている。天皇が腰を曲げてしゃがみ作業をする姿。人々は、このカジュアルな装いに親近感を持つかもしれない。しかし、この意外性と相まってさらに、この献身的な姿に畏敬の念を持つ人々もいるのではないだろうか。

養蚕に関連する行事、例えば2014年「初繭掻き」では、皇后は養蚕室のようなところで職員と向き合っており、皿に盛られた繭を大事そうに掌(たなごころ)で包んでいる。衣服の上着は襟もとが着物のような打ち合わせであり、素材も薄茶色の紬のようである。ウエストは濃い茶色のサッシュ状のベルトが締められ、スラックスはグレイである。まさに養蚕と織物の伝承の意識を、その装いからも感じ取ることができる。

一般の人々がカレンダーから、天皇・皇后のこうした宮中内での伝統行事とそれにたいする真摯な様子を知ることができるのは、貴重な機会だといえるだろう。

2.2.4-①「天皇皇后両陛下」：日常の仲睦まじさ

7・8月の写真は10点のうち、7点が普段着の「天皇皇后両陛下」である。例えば2017年は、御所お庭での二人。鬱蒼とした緑を背景に、前面には紫の小花が生い茂っている。その間に天皇が佇み、傍らに寄り添うように皇后が立ち、その手は、天皇の腕に回されている。2010年に結婚50周年を迎えた二人。日本人のこの年代の一般の夫婦で、このような仲睦まじさを見せる場面は、そう

多くはないと考えられる。2014年の写真は軽井沢町野菜畑とクレジットにある。一面にキャベツが元気よく、葉を生い茂らせている。そのキャベツ畑の間に立つ二人は、向き合い、笑いあっている。何かとても楽しいことを話しているようである。日常生活のこうした風景のひとつコマにこそ、カレンダーを見る人々は共感するであろう。

2.2.4-②「天皇皇后両陛下」：日常のファッション

このような日常では、天皇はシャツにベルトレスのストラックスが多い。シャツはベージュや水色、グレイ、ストラックスはグレイや茶といったベーシックな色である。動きやすさという機能性と、身体を締め付けない気楽さという快適性が尊重された装いである。しかし、一般の人が普段に着的ストレッチ素材のゴルフウェアなどの着用は見られない。ここに天皇としての毅然とした姿勢を感じることができる。

美智子皇后の装いも、ベーシックな色合いが多いが、デザインにはこだわりがあるように推察される。襟はそのどれもがスクエアネック。俯いたり、頷いたりした時に、首に触らない。そのような動作に対応するデザインである。さらに、その胸元には多くの場合、ネックレスやペンダントが着用されている。首元のアクセサリは、顔を明るく見せる効果がある。皇后として齢を重ねても美しく装う、その意識が日常生活の場面でのアクセサリに表れているのではないだろうか。多くの国民に慕われる皇后としての美智子皇后の自覚を、その日常にさえも装いから読み取ることができる。

2.2.5-①「秋篠宮ご一家」：澁刺と育つ内親王と親王

9・10月は、「秋篠宮ご一家」の写真が多く掲載されている。実りの秋という季節に相応しい一家である。特にその発育が目覚ましいのは悠仁親王である。2011年9・10月は4歳であった親王が、2018年には12歳。2011年は、芝生の上、黄色く色づいた大木の下での一家の写真である。左に秋篠宮文仁親王、右に紀子妃がしゃがみ、その膝に悠仁親王がちょこんと、座っている。文仁親王の後ろに眞子内親王(20)、紀子妃の後ろに佳子内親王(17)が立っている。秋篠宮家のこの二人の内親王も、まだ頬がふっくらして幼さが残る表情である。母に抱かれた悠仁親王の手の指がまだ赤子のような膨らみを残し、ほほえましい。しかし、9年後の2018年になると、一家がとても落ち着いた雰囲気となっている。淡い緑の絨毯敷きの部屋で、ローテーブルを前に、左から紀子妃、秋篠宮文仁親王、悠仁親王、眞子内親王、佳子内親王と座っている。テーブルの真ん中には、丸く小さな天然石が丸い盆状のようなものに並んだゲーム盤のようなものが置かれている。その傍らには、アラビヤの小さな縫いぐるみ等もある。悠仁親王は、ゲーム盤に両手を添え、生き生きとした表情である。悠仁親王が何か話をし、家族一同が、皆それに興味深げに聞き入り微笑んでいる様子が伝わってくる。幼いころは母に抱かれていた親王が、今は家族の中心で力強い存在となっていることが印象付けられる。

2.2.5-②「秋篠宮ご一家」：それぞれの個性あふれるファッション

秋篠宮一家の方々の日常の写真のファッションから、それぞれの個性も見ることができる。2011年9・10月の秋篠宮文仁親王は、ほとんど白髪といって良いグレイヘアである。この年、文仁親王は46歳。まだ白髪になるには一般には早い。しかし、親王は染めることなく堂々としている。グレイヘアでも黒い髭と、肌の張りが若々しく、白髪ではなく、まるでリチャード・ギア²¹などの髪の色と同色のような印象である。薄グレイのタートルのセーターが髪の色と似合い、スタイリッシュである。また、左手薬指の結婚指輪だけでなく、右手薬指にも指輪が見られる。指輪の着用には本人の意思、意味があるとは推察できるが、これもお洒落である。この後、2012年には黒い髪が増え、グレイがまばらになり、2013年には、大部分が黒髪でグレイがメッシュ状に残っていたが、2014年には黒髪となっている。グレイであっても、黒髪でも、秋篠宮文仁親王のスタイリッシュさ、スマートさは変わらない。

2014年の秋篠宮紀子妃の装いは、ベージュのカーディガンと、茶のスカート、首元には白地に臙脂色のペイズリー調のスカーフがまかされている。柔らかな素材の装いながら、カーディガンの丈は腰上部と短めで、大きいボタンがアクセントとなった端正な装いとなっている。このように、紀子妃の装いには常にきちんとした感じが備わっている。2018年、悠仁親王のゲームの説明をにこやかに聞く時の装いは、紺のニットワンピースである。前面にパネル状に、水色と紺の格子状の柄が見え、首元はタイになっており、顔の横で結び垂れている。その部分に小さな放射状のブローチが銀色に光っている。パールのようにも見える。このブローチが、紺の深い色と対照的なアクセントとなり、格子柄の堅いイメージを和らげている。紀子妃にはこのように端正な中に優しさを感じさせるようなファッションが多く見受けられる。

眞子内親王にも、そのファッションから紀子妃のような端正な印象を受ける写真が多い。しかも、それにシックで落ち着いた印象が加味されている。2018年9・10月の家族の写真では、眞子内親王(27)は、紀子妃と同色の紺色のワンピースである。しかし、その上にやや濃いめのベージュのノーカラーのジャケットを着用している。紺と濃いベージュの取り合わせは、一般にはなかなか考えられないが、とてもシックな色合いとなっている。胸元には金鎖のペンダントが光る。眞子内親王の写真の表情には、優しさの中にその意思の強さを感じられるものがある。このペンダントもそのように一点キラリと光っている。

一方、佳子内親王はカジュアルなお洒落がとても上手である。注目したいのは2014年9・10月の装い。父である秋篠宮文仁親王は紺のブレザーにダークグレイのスラックス、ピンクストライプのシャツに紺にピンクドットのネクタイ、とスマートでお洒落な装いである。母である紀子妃は先に述べたベージュのカーディガンに茶のスカートとカジュアルでありながら端正な装い。横に並ぶ佳子内親王(20)は、きっぱりした赤のロングカーディガンを、黒い細身のパンツに合わせ、足元は、グレイのニットをあしらった靴紐付きの黒いショートブーツである。下に着た白シャツが、顔を明るく映し、カジュアルで華やかな雰囲気伝わってくる。白シャツの折り返した袖口もおしゃれである。何よりも、きりりと結んだ口元が可愛らしく、見開いた目もとがくっきりと若々しく、滲刺

としている。

同じ2014年9・10月の悠仁親王（8）は、母である紀子妃と同色系のやや薄いベージュのジッパ一付きカーディガンにやはり同色のやや薄い茶系の長ズボンと、おとなしい印象であるが、4年後、2018年9・10月の悠仁親王（12）は父にも負けないうらいスタイリッシュに衣服を着こなしている。ブルーのチェックのボタンダウンシャツにブルーグレーのV字ネックのセーター、スラックスはテーブルの下で色味は判別できないが黒か紺といったダークな色である。幼い頃は、着せられていた衣服を、12歳となったこの年頃には、自分で着こなしていることが写真から明確に伝わってくる。

2.2.6-①「天皇皇后両陛下」：来し方行く末をともにみつめて

11・12月は「天皇皇后両陛下」の皇居内での写真と推察できるものが多い。10年間で、7点が、スーツ姿の天皇と、着物姿の美智子皇后である。2012年11・12月の「天皇皇后両陛下」は、古い建物の縁側のようなところに二人腰を下ろし、肩を寄せ合い何かを語らっているようである。望遠カメラで撮っているのか、その表情は極めて自然である。まるで、これまで自分たちの歩んできた人生の、自分たちしか知らないことを語り合っているような、美智子皇后は遠くをみつめ、傍らの天皇は、目を細めている。二人とも背中を少し丸め、緊張が解きほぐれたかのような姿勢であるところから、このような印象を受けるのかもしれない。

そして2014年11・12月は、紅葉の木々を背景に、遠くを見て並んで、石垣の前に立つ二人。左に天皇が立ち、右に皇后が立っている。二人の距離は肩が付かず離れず、といったものであるが、その心が一つに通い合っているように見受けられるのは、その視線の先が同じものをみつめている、というイメージからであろう。2012年11・12月の写真の姿勢とは違い、二人とも背筋を伸ばし、遠くを見ている。2012年が来し方について話していたかと思えば、こちらは行く末を見ているような印象である。

2.2.6-②「天皇皇后両陛下」：グレイのダブルスーツと着物：いつも変わらぬ二人

7・8月で多くみられた日常の「天皇皇后両陛下」と違い、11・12月の「天皇皇后両陛下」の装いはより公的である。11・12月の天皇は8点がグレイのダブルスーツである。1・2月の「新春をお迎えの皇室ご一家」でも、天皇は黒いダブルのスーツを着用している。白シャツにグレイのダブルスーツ、白か淡い色のポケットチーフ、それが天皇の公の場での一番落ち着く装いなのではないかと推察できる。さらに、ネクタイも、時折同じものが着用されている。2010年11・12月、2011年11・12月、2012年9・10月と、モスグリーンネクタイである。また、2010年5・6月、2012年11・12月、2018年7・8月は黒と茶のストライプ、と同じネクタイである。天皇であるからといって、様々なネクタイを持つのではなく、一つひとつ、多分こだわりや思い入れを持って大切に着用していると推察できる。

カレンダーに掲載される写真の美智子皇后の着物は、ほとんどが薄い色である。2012年11・12

月、縁側でグレイのダブルスーツを着用した天皇と語らう美智子皇后の訪問着は、オフホワイトの淡くすっきりした色味である。柄は遠目で良く判別できないが、着物地よりも更に淡い色で松葉散らしのような柄でもある。胸元にはうっすらと金色の模様も見える。帯はベージュで菱形のような幾何学模様の織の帯である。帯締めは金と白の変わり織で矢羽根柄にも見える。美智子皇后の帯揚げは殆どの場合、白かそれに近い色で、帯揚げが殆ど見えない着付けである。

行く末をみつめているかのような2014年11・12月の美智子皇后の着物は、グレイの色無地に黒地の帯。帯には刷毛でさっと塗ったような金色の四角が重なっている。帯締めは白を基調として黒のアクセントが入り、縁が金に近い黄色である。帯揚げは白。大変お洒落だと思うのは、着物の袖裏に模様が入っているところである。襟はあまり抜かず、この時は胸元を鋭角にすっきりと合わせて着付けられている。天皇のグレイのスーツ、グレイのポケットチーフと、お揃いとなっている。背景の赤い葉にこの装いが生え、常日頃自然に親しむ天皇皇后ならではの、自然体の美しさを感じる写真である。

2.3. 平成から令和へ：モーニングコートの天皇とローブモンタントの雅子妃

2019年の5・6月には、モーニングコートの天皇とローブモンタントを着用した雅子皇后の写真が掲載されている。この月から元号は令和となった。「皇室御一家カレンダー」が製作・発売された2018年にはまだ、元号は発表されてはいなかったため、2019年の5・6月以降は「新元号元年(2019)年」となっている。オフホワイトの絨毯の上に佇む、天皇と雅子皇后は、明るく微笑んでいる。二人はこれまでのカレンダー掲載写真において、他の人びとより、笑顔が明るかった。明るいという判断はより笑っている表情ということで、基本は歯が見えているか、いないかで判断する。この写真は、歯は見えていないのだが、顔の筋肉や目元が、歯が見えている時と同様に見える。長年「笑ってきた」その蓄積ではないかと推察される。明るい笑顔であるがゆえに、正装の二人から、良い意味でさほど緊張感が見られない。手を体側において、まっすぐに立つ天皇と、その右側の少し後ろに重なるように立つ皇后。皇后は織模様の布地の水色のローブモンタントを着用し、手に扇と白手袋を持っている。ドレスの襟はドレープ状に重なりボリュームがある。大粒真珠のネックレスとイヤリング、ブローチと指輪が、雅子皇后を一層、重厚で、華やかな存在にしている。

見る人の心も晴れやかにする、令和の新しいページを飾るにふさわしい、一枚である。

3. メディアとしての「皇室御一家カレンダー」

以上のように、10年に渡る「皇室御一家カレンダー」に掲載された写真を、フレームにおさまる人物の状況と、ファッションを視点としてみてきた。

通常1・2月は「新春をお迎える皇室ご一家」の写真が掲載され、そこには若い内親王、親王を見守る皇室の大人達のあたたかな眼差しを見ることができた。また日本の伝統衣装である着物に対する並々ならぬ美智子皇后の思いを見ることができた。

3・4月は「皇太子ご一家」の写真で、「皇太子ご一家」の写真の三人の写りこみ方の変遷から、一人娘である愛子内親王の大きな成長の過程と、両親の喜びを見ることができた。プライベートな場面では、皇太子は、オーソドックスだが、常にバランスの取れた服装であり、雅子妃は飾りたてずシンプルだが、華やかさが感じられるファッションである。また愛子内親王は「甘さ」を加味したデザインが多く愛らしさが感じられるファッションである。

5・6月は天皇皇后の稲作と養蚕の行事が写真となり、日本の伝統文化を皇室が率先して継承していく様子をうかがい知ることができる。天皇が水を張った水田に長靴で入り田植えをする姿は、見る者に畏敬の念さえ感じさせるのではないだろうか。養蚕の作業をする皇后は、着物のような衣服を着て蚕を大切に扱う。

7・8月は日常の「天皇皇后両陛下」である。自然の中で仲睦まじく寄り添う天皇と皇后。日常生活のひとコマにこそ、カレンダーを見る人々は共感するであろう。日常の天皇は動きやすさという機能性と、身体を締め付けない気楽さという快適性が尊重された装いであるが、ストレッチ素材のゴルフウェアなどの着用は見られない。ここに天皇としての毅然とした姿勢を感じることができる。美智子皇后の装いも、ベーシックな色合いが多いが、デザインにはこだわりがある。皇后として齢を重ねても美しく装う、その意識が日常生活の場面でのアクセサリーに表れている。

9・10月は「秋篠宮ご一家」の写真が多く掲載されている。秋篠宮家の澁刺とした内親王と親王の年ごとの成長が伝わってくる。そしてスタイリッシュな秋篠宮文仁親王、端正で優しいファッションの紀子妃、シックな眞子内親王、カジュアルなお洒落が上手な佳子内親王、と一家のファッションを楽しみにする者も多いことであろう。何より10年という時を考えると、一番大きな変化があるのが悠仁親王で、幼かった親王も10年を経て、ファッションを自分のものとしてお洒落に着こなす姿が見られた。

11・12月は再び「天皇皇后両陛下」であるが、こちらは皇居内での撮影と推測できるやや公式な装いである。天皇は常にグレイのダブルスーツで、これが公服のようでもある。「天皇」とっては一番落ち着く「衣裳」なのかもしれないと推察する。そして同じネクタイが何回も着用されている。様々な思い入れを察することもできる。美智子皇后にとっては着物が「皇后」としての「衣裳」であると推察できる。日本の伝統を自然体で継承していく、そのような姿勢が感じられる。

そして2019年5・6月は令和元年のスタートとなった月であり、新しい天皇と雅子皇后の正装の写真が掲載された。この10年47枚のうちで、ただ一枚の正装の写真である。それだけにインパクトも強い。天皇・皇后の晴れやかな笑顔が、新しい時代を迎えた購買者をさらに、明るい気持ちにさせるのではないだろうか。

日本の天皇は象徴²²である。しかし、こうしてカレンダーをとおして「皇室御一家」をみていくと、親が子を見守り、成長を寿ぐ、自分たちと変わらない夫婦や家族のかたち、愛情をその写真から感じ取ることができる。生身の人間としての、身近な存在としての「皇室御一家」を感じることのできるメディアが「皇室御一家カレンダー」である。

【参考文献】

- 青木淳子、2017年、『近代皇族妃のファッション』、中央公論新社
- 青木淳子、2018年3月、「新聞記事にみる天皇家の婚儀—新たなプリンセス像の創出」
『大東文化大学紀要』、大東文化大学、pp1-16
- 伊藤之雄、2005年、『昭和天皇と立憲君主制の崩壊』、名古屋大学出版会
- 岡田芳朗：編集代表者、2014年、『暦の大事典』、朝倉書店
- 暦の会©編著、1999年、『暦の百科事典 2000年度版』、本の友社
- 新藤暦展示館、2008年2月、「世界のカレンダーに見る暦の歴史」、『印刷界』、日本印刷新聞社、
pp36-43
- 多木浩二、2002年、『天皇の肖像』、岩波書店
- 春山行夫、1965年、「カレンダーの起源—カレンダーはローマ時代から」『カレンダーの研究』、印刷時報社、pp148-152
- 判例六法委員会編者（代表 竹下守夫）、『模範六法 2017 平成 29 年度版』三省堂
- 茂木謙之介、2017年『表象としての皇族』、吉川弘文館
- 森暢平「ミッチーブームのその後」2013年、河西秀哉編『戦後史のなかの象徴天皇制』吉田書店
- 柳崎正雄、1978年4月「現代カレンダー考—歴史と統計からみれば」『印刷雑誌』、印刷学会出版部、pp31-36
- 吉見俊哉、2003年、「メディア天皇制とカルチュラル・スタディーズの射程」、『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』、人文書院 pp234-260
- 若桑みどり、2001年、『皇后の肖像—昭憲皇太后と女性の国民化』、筑摩書房

-
- ¹ 平成5年に財団法人菊葉文化協会として発足。皇室ゆかりの文化事業の推進、皇室の活動の紹介、皇居・京都御所等の参観者・入園者へのサービスの提供、皇居・京都御所等の環境保全、維持管理等に対する協力などが事業の内容である。なお、「皇室御一家」カレンダーは平成7年より発行・頒布されている。(www.kikuyou.or.jp2019年9月6日参照)
- ² 「皇室御一家」カレンダーの他にも「皇室御写真集」カレンダーがあり、株式会社トライエックス(1977年創業 <https://try-x.jp/corporetion/> 2019年9月6日参照)が販売している。こちらは縦530mm、横38mmである。「皇室御一家」カレンダーとは写真の構図は同じでも、顔の向きが違うものなどが掲載されている。
- ³ 楽天市場では「皇室カレンダーはカレンダー部門の売り上げランキング2位、注目ランキングで1位」である(<https://tubuyaki3.com> 2019年9月6日参照)
- ⁴ 編集者：暦の会©、1999年、本の友社
- ⁵ 編集代表者：岡田芳朗、2014年、朝倉書店
- ⁶ 春山行夫、1965年、『カレンダーの研究』、印刷時報社、pp148-152

- ⁷ 柳崎正雄、1978年4月『印刷雑誌』、印刷学会出版部、pp31-36
- ⁸ 新藤曆展示館、2008年2月『印刷界』、日本印刷新聞社、pp36-43
- ⁹ 多木浩二、『天皇の肖像』2002年、岩波書店
- ¹⁰ 若桑みどり、2001年、『皇后の肖像—昭憲皇太后と女性の国民化』、筑摩書房
- ¹¹ 伊藤之雄、2005年、『昭和天皇と立憲君主制の崩壊』、名古屋大学出版会
- ¹² 青木淳子、2017年、『近代皇族妃のファッション』、中央公論新社
- ¹³ 森暢平、2013年、『ミッチーブームのその後』、河西秀哉編『戦後史のなかの象徴天皇制』、吉田書店
- ¹⁴ 茂木謙之介、2017年『表象としての皇族』、吉川弘文館
- ¹⁵ 青木淳子、2018年3月、『新聞記事にみる天皇家の婚儀—新たなプリンセス像の創出』、『大東文化大学紀要』、大東文化大学、pp1-16
- ¹⁶ 吉見俊哉、2003年、『メディア天皇制とカルチュラル・スタディーズの射程』、『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』、人文書院 pp234-260
- ¹⁷ 研究論文であるため、敬称を省略させて頂いたことをご了解頂きたい。
- ¹⁸ 青木淳子、2017年 前掲書 p334。勿論これは戦前の規律であるので、現在洋装の着用は、基本とされているが、慣習という形で国際的なプロトコルに則って判断されていると筆者は推察する。
- ¹⁹ 皇居での稲作は昭和天皇から引き継がれたものである。稲の一部が伊勢神宮に奉納されるほか、新嘗祭などの宮中祭祀に使われる。(産経ニュース・2018年5月25日 <https://www.sankei.com/life/news/180525/lif1805250039-n1.html> 2019年9月12日調査)
- ²⁰ 皇居での養蚕作業は、明治時代の昭憲皇太后から引き継がれている。(ANN ニュース・2018年5月2日 <https://www.youtube.com/watch?v=v--Df698Aqg> 2019年9月12日調査)
- ²¹ リチャード・ギア (Richard Tiffany Gere) 1949年～、アメリカ合衆国の俳優。
- ²² 日本国憲法 (施行 昭和22年5月3日) 第一章 天皇 第一条 [天皇の地位、国民主権] 天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であって、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基づく。(編者 判例六法編修委員会 代表 竹下守夫『模範六法 2017 平成29年度版』三省堂 p21)

(2019年9月26日受理)